



あとがき



去る1月に三度目のインド訪問を果たしました。バンガロールというデカン高原南部（北緯12度）に位置する街です。南半球に滞在したことのない私にとって、この街はこれまで足を踏み入れた中で最南端の地となりました。インド訪問も3度目となると大分要領を得て、体調など何の問題もなく、愉快に滞在を終えてウィーンに戻りました。

インドのEXFOR編集活動の取りまとめをしているのはミゾラム大学の若手スタッフ Lalremruata Bawitlung 氏です。ミゾラム州はビルマとの国境に近く、先の大戦の戦地として知られるインパールの近くです。ミゾ族はモンゴロイドで、彼らの顔つきは日本人の我々に親近感をわかれます。ほぼ全ての人がキリスト教徒という点も、インドの中ではかなり特殊です。僻地の大学ですが、Lalremruata 氏はここ数年加速器の自作に励んでいて、イオン源の制作がかなり進んでいるようです。

ミゾラム州では酒の販売が規制されています。今回、何か買って行ってやろうか、と彼に問うたところ、彼は、「州外に出たらいつも Johnnie Walker の『ゴールド』を買う」と言います。「ジョニ金」なんて聞いたことないが、まあ州外に出る都度買うくらいだから、そう高いものでもなかろう、と了解して店にでかけると（私にとっては）結構な値段で驚きました。こうやってちゃっかり「ジョニ金」を手に入れる辺り、彼もインド文化を引き継いでいるのかも知れません。

ともあれ、インドの人たちと楽しく仕事が続けられているのは、この Lalremruata 氏やインドのデータセンター長の Alok Saxena 氏 (BARC) の味わい深く、また器の広いお人柄によるところが極めて大きいのです。

人柄という点では、今号掲載の拙稿執筆にあたり、過去の核データニュースの記事を色々と調べるうちに、日本の核データ分野の先達の方々のお人柄に触れた感がありました。その一つが土橋敬一郎氏の記事です。特別研究生として原研（先端基礎研究センター）に滞在していた私は、彼と建屋が同じでした。言葉を交わす機会こそ皆無ながら、大学院生の私にとって、彼はずっと気になる存在でした。今回、彼がかつて NEA Data Bank で EXFOR の仕事をされていたこと、また東日本大震災の直後に亡くなられていたことを知りました。当時の思い出話を彼から何う機会を失ってしまったのは残念です。しかし、炉物理専門の土橋さんが EXFOR を熱く語られておられることを通じ、彼とのつながりを核データニュースの中に発見し、当時を懐かしみました。ちなみに、土橋さんもウィスキーがお好きだったようです。

大塚 直彦（2015年2月記）

日本原子力学会核データ部会
核データニュース編集小委員会

喜多尾憲助（元放医研）、井頭政之（東工大）、石川 眞（原子力機構）、
岩本 修（原子力機構）、中川庸雄（元原子力機構）、渡辺幸信（九大）、
山野直樹（福井大）、大塚直彦（IAEA）、中村詔司（原子力機構）、
小浦寛之（委員長、原子力機構） [編集]石橋貞子